

氏 名 大西 雅子

学 位 の 種 類 博士（美術）

学 位 記 番 号 第 95 号

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目 「農」からの「知的生産」～思考と創造のアーカイブ

審 査 委 員 主査 教授 高橋 悟

教授 井上 明彦

教授 小山田 徹

教授 ひろい のぶこ

塩見 直紀（福知山公立大学地域経営学部特任准教授）

論 文 の 要 旨

この研究は、タイトルを「農からの「知的生産」～思考と創造のアーカイブ」とし、自身の生きてきた農村部での生活経験から発想した「人がより良く生き、創造的生活を探究するための根本的な技法」を研究するものである。

この研究の発端は、自身が高校美術教師として美術教育に従事したことから始まる。1986 年京都市立芸術大学大学院を修了してから教師になるまでの約 20 年間で、都会から農村部への移住、3 年を費やしたセルフビルドでの住居建築、村入り、子育て、就農などを経験した経緯から、高校生に伝えるべき創造の原点が農村での生活体験であることに気付いたのである。この気付きの経験を経て、創造の原点として農村の生活を捉え直し、文化的資本としての手法を考察し、研究・実験を進めるに至った。

第 1 章として、研究の目的を挙げている。「農」の空間には多くの創造における「鍵」が存在し、その「鍵」は何時どこで活用されるのかは分からないが、共有化・汎用化することで芸術のみならず社会全体や流通システムに対する提案に繋がることを示唆している。

第 2 章では、自身が居住している「京都府船井郡京丹波町妙楽寺」を知ることで研究の場への理解を深めている。京丹波町は京都府のほぼ中央に位置する中山間地域で、人口が徐々に減少し高齢化が進む一般的に言う農村集落である。また、妙楽寺地区にある農業の現状から都市近郊にある中山間地農業の限界を指し示す情報も提示している。「農」の空間にある社会問題は日本の社会全体の問題とも置き換えることができるのである。

第 3 章では具体的な研究手法について述べている。まずは、民俗学者の梅棹忠男氏の「知的生産の技術」におけるカード作成法に着想を得た「農」の空間にある「鍵」を記録する手法を展開してい

る。それは、カード作成の前段階として「農」の空間で生活してきた情報を記述する調査シートの作成から始まる。その調査シートは過去 20 年に渡り撮り貯めてきたデジタル写真の洗い直しであり、なぜ写真を撮ったのか？何に興味があったのか？を分析するメモ帳代わりのものである。次の段階は、その調査シートを分析し、複数の項目設け、分類・活用法・季節・通し番号などを記載した「NOカード」と名づけたカードシステムの構築である。次にその「NOカード」の活用の方法について実践的な 5 つの展開を示している。

第 4 章では、「ここ」から発生した研究を「どこか」へ繋げて行く為の試行例を展開した。試行例①は「ここ」と「すぐそこ」で共有する媒体として「NOカード」を利用した。その結果として、複数の人が集い語る場でお互いが理解しあうことを助ける展開が見受けられた。試行例②としては、「NOカード」を行為として提示することで「どこか」に拡散できないかを試みた。それは、農業従事者が耕作の継続可能・不可能かを圃場に旗を立てることで可視化し、反応を待つものである。この試みは一度の試行では結果が読めず、繰り返し時間をかけてゆっくり進行する事を期待しながら待つものであった。この二つの試行結果を踏まえて、特定の地域である「ここ」と「どこか」を繋げていくためのネットワークを構築するために、「ここ」で得られた「鍵」をオープンソース化するためのプラットフォームの構築を提案している。そこで考慮されなければならないことは、実在し手に取って見るものであるカード形式での情報蓄積をあえて選んだこの研究で、個々の人が背負っている記憶や祖先の歴史なども意識した上で、人の顔と顔が見える環境でのプラットフォームを築かなければならないことである。この事から、カードを並列に並べることでできる移築可能な小屋形態の保管庫を提案している。この保管庫の建設は、世界中の人の為のオープンソースとしては卑小なものであるが、同じ時間、同じ空間の中で目の前にいる人とのプラットフォームを共有するには事足りる構築物である。この小屋型保管庫は「ここ」から「どこか」への最初の第一歩としての位置づけを示している。

最後に結論として「鍵」の蓄積と創造の根源的な結びつきについて考察している。現代社会の情報過多な生活環境の中で、「農」の空間にある情報は人の生き様や祖先からの伝承を組み込んだ「時間と土地」、「時間と人」、「人と土地」の関連しあった情報である。そして、情報化した現代社会の中で新たな「創造」をする時、今の「ここ」が過去や未来へと通ずるものであると理解し、「そこ∞」へと連結させていくことは新たな創造へ導く「鍵」と成り得るのではないと論じている。また、この「鍵」の蓄積は時間を経て、記憶のようなものとなり、また記憶の集積は「伝説」や「言い伝え」や「先祖代々の家庭料理」のような情報として形のない「記憶の森」になることで、現代社会の情報の意味を問い直すことになるのではないだろうかと結んでいる。

審査結果の要旨

研究制作の目的と方法

大西氏の研究は、京丹波の農村(妙楽寺)での25年間にわたる暮らしの経験から得た知識や技術、さまざまな気づきを、創作活動を促す「鍵」と捉え、それを他者にも共有可能なオープンソースとして具体化すると同時に、自らもそれを活用した実践例を提示するものである。具体的な研究手法としては、大西の作業は五段階に分けて進められた。まず、民族学者の梅棹忠夫氏の「知的生産の技術」におけるカード作成法に着想を得て「農」の生活や空間に存在する「鍵」を記録する調査シートを作成することが第一段階。調査シートの分析に基づき、複数の項目を内包する分類・活用法・通し番号を記載したNOカードと呼ばれるカードシステムの構築、これが第二段階。大西は、地域でも見返られることが少ない農作物・資源を創造的に転用した生活用品の制作を継続してきたが、それら生産物とカードを照らし合わせることで、情報と生産をつなげる発想の種としてNOカードを位置付ける作業を進めた。これが第三段階。次に、作成したカードを地域の家庭に持ち込み、複数の他者が集い語る場を形成する媒体として活用すると共に、新たな知見の情報収集、フィールドワークの道具として使用したのが第4段階。最終段階は、特定の地域に関わることで考案された方法を、他の場所、他の人たちとも共有し、形や言葉にされにくい生活に関わる技法のネットワークを構築し、オープンソースとして、危機におけるオルタナティブな記憶の道具箱とすることが目指されている。

メディアアート領域に於ける「研究制作」発表と「作品」概念

次に、大西の研究制作の展示発表について述べる。シリンダー状の大学会館ホールの空間を有効に活用したもので、ホール床には円環状に狐の皮、瓢箪、藁などの素材とそれを活用して作成したカバン、帽子の他、農村での日々の暮らしから得られた詩的なコトバや漫画、NOカードと、そこから抽出されたコトバがコーパスとして配置された。さらにホールの中央には、木製のカード保存倉庫が設置されたが、これは釘やネジなどを一切、使用せず、木組みの手法で作成されたものであり、解体、移動、再展示が可能になっている。作品の鑑賞者は、静観的な美的経験に加え、ホールの中を回遊しながら、歩きつつ読みつつ見つつ触れるという複数の身体行為を誘発するような、絶妙のバランスで配置されており、そこから、個々の鑑賞者の想像力により、日々の新たな発見が生まれるようになっている。この小屋は、今後、様々な企画の場所に移築されていく予定であり、農にまつわる「知的生産」のストックの交換場ともなる。この小屋が様々な場をめぐり、いつか生活の中の場として定住した時、それは多くの人々の結節点として機能するであろう。展示の総体としては、生活の中の時間や記憶を含めた文物の提示と小屋の空間は十分に美しく魅力的な提示であり、論文とのバランスの中で有効な展示である。大西の研究制作発表においては、従来の美術作品に於ける美的経験の創出とは異なり、研究プロセスを辿りながら、その意味を個人が活用可能な形として開かれたものであり、モノとしての完結を目指したものではない。それは、作者・鑑賞者という美術の制度的関係に於ける大文字の作品(ART)から距離を取り、生きる為の多様技術:小文字で複数形の arts = 「生存の技法」へとへと繋がっている。そのため大西の研究・制作は高度なデジタル技術を駆使し

たインターアクティブなメディア・アートのアプローチとは異質なものである。しかし、人と技術、情報と生産、個人と社会を従来とは異なる手法で結びつける方法・媒体の提案という意味では、従来の作品概念を刷新する、より根本的な意味でのメディア・アーツとして位置付けることができる。

結論

第二回目の審査においては、カードシステムの構築とその社会へのシステムの流通というアプローチ、特に、「どこでもだれもが」提供しうるカードシステムという方法についての再検討が指摘された。上記を踏まえ、今回の発表においては、「どこでもだれもが」提供しうるカードシステムという方法ではなく、大西個人の経験に基づく視点からの提示方法が強化された。特に瓢箪・たぬきの皮・鹿の角・ネズミの皮・雑草から作られた紐・織物など手作業による工作物を配した展示会場で、人々がそれら具体的なモノを取り囲み互いに顔が見える状況：創造的な対話の場を生み出す事に成功しており、強いインパクトを持ち得た。顔と顔が互いに見える場所で、一定の時間を共にしうる場所は、農に関わる生活にとっても根源的なものであろう。のっぺらぼうでフラットな情報としてではなく、個人の経験をかけがえのないものとして共有しうる記憶の場について、十分な説得力をもった形での提案がなされた点を高く評価する。申請者の提示したものは、消費するだけの現代人の暮らしへの、農村からの「押し戻し」であり、心は作家、生業は農という在りようが、美術より一回り大きな教育の形としても有効である。大西氏が言う「鍵」のストックに関しては、今回はあえて個人的な知識のストックにとどめているが、このフォーマットが他者にどのように共有され、関係性が構築されていくのかの検証が今後なされてゆく事を期待する。大西が提出した問題は、生活と共に時間をかけてなされていく研究であり、十分に新しい分野を切り開いた研究成果であると評価する。